

農村における文化伝承活動の推進と普及活動

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	森, 時代
巻/号	38号
掲載ページ	p. 29-31
発行年月	1975年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農村における文化伝承活動の推進と普及活動

山形農業改良普及所 森 時 代

Succession of Rural Culture and Extention Work

Tokiyo Mori

Yamagata Extention Office

1. はじめに

従来農村社会は、そこに住む人びとの生産と生活の共通の場として村落共同体を形成し、地縁、血縁を通じて内部のまとまりをもち続けてきた。そして、このまとまりがの村を動かす大きな力であった。

ところが高度経済成長の過程で、農家間の階層分化が急速に進むとともに兼業農家が激増し、農家の生活行動は多様化した。その結果、村の中で、共通目標をかかげての組織活動が困難になってきている。このことが農村文化の荒廃やコミュニティ意識の喪失を招き、さらには農村生活環境整備の推進を阻害する要因ともなっている。

そうした状況の中で、農業の近代化、機械化の進行に伴って農業就労からおし出された農村の高令者は、これという生きがいを見出せないまま内容に乏しい毎日を送っている。このような現状を打破し、高令者をとりまく子世代、孫世代とが力を合せた農村文化の伝承活動を通して、コミュニティ意識の醸成と、高令者に生きがいと役割りをもたせることをねらいとした普及活動にとりくんだ。

これは、普及活動の分野では未開拓な課題であるため、実施に先立って、筆者なりの問題整理と解決策の見通しをたて、それに基づいて具体的な活動の推進をはかった。その活動経過と問題点を整理し、今後の普及活動の展開に資したいと考える。

2. 中山町の概況

この普及活動の対象とした中山町は、山形県の中央部に位置し、県都山形市より北西に14kmの地点にあり、最上川の基点として栄えた田園の町である。

町の総面積は約32km²、戸数2,495戸、人口11,346人(昭和48年)の小さな町だが、田植え踊りなどの芸能や、すぐれた民話など、伝承文化の豊富な町である。昭和44年6月山形市などとともに新都市計画法の指定を受けて、180haに及ぶ市街化区域が設定され、山形市のべ

ッドタウン化が進んでいる。

町の農業は、総耕地面積1153ha(うち田824ha、畑79ha、樹園地250ha)、農家戸数1,375戸が示すように、1戸平均の耕地面積は0.83haと県全体の1.39haより遙かに小さく、専業農家率もわずか8.4%にすぎない。米42%、果樹22%、畜産15%、その他11%という農業生産額の構成から明らかなように、大部分の農家は、米プラス果樹の複合経営の形態をとっている。

3. 課題の背景とその内容

中山町における55才以上の高令者人口は、町の総人口の22%にあたる2,500人で、そのうち農家高令者は半分以上の55%を占めている。これら農家の高令者をめぐって、どのような問題が生じているか、ここでの課題の背景を、農家高令者へのアンケート結果(回答は男290人、女480人、計770人)を通じてさぐってみた。

まず、高令者の農業経営に対する関与の程度をみると、770人のうちで経営主であるものが20%おり、農業に従事しているものは、それらを含めて全体の62%に及ぶ。この結果をみても、本町では、山形県全体と比べて50才以上の農業従事者の比率が高く、老令化の進んでいることがわかる。

さらに農作業従事の内容を部門別に多いものからみると、稲作、畑作、果樹作、畜産の順で、しかも施肥、水管理、摘花(果)作業など、経験技術を必要とする軽作業を主に担当している。

次に財布のもち方では、国民年金の受給資格年齢である65才を境に、それ以前は高令者がもち、65才以後は息子夫婦に譲っており、従来の年祝(厄ばらい)の61才よりも4才程遅くなってきていた。

こうした高令者(親世代)に対する家族の役割評価は、子世代、孫世代とも労働に対する期待感が第1位であり、次いで精神的期待、あるいは助言者としての期待がもたれている。他方地域住民として、地域の発展に関する建設的な発言や地域活動に参加している高令者は、全体の17.4%にすぎず、しかも特定の人に限られてい

る。

総じて高令者は、働くだけが生きがいで、他に人生目標、生活目標をもっていないことが指摘できる。こうした高令者に対して、家族と地域社会の中で生きがいとなる役割りをもたすことが、家族、地域社会を通じて失なわれつつある社会的連帯をとり戻す、重要な1つの足がかりになると考えた。

そこで、農林省が推進している農家高令者生活開発パイロット事業を通じて、家族や地域住民との連帯の中で行なわれる高令者の役割活動の積極的な展開をはかろうと試みた。高令者の役割意識は、表-1にみるように多様であるが、ここでは、中でももっとも高く現われた生活文化の伝承など、文化伝承活動をその中核にすえることとした。

表-1 高令者の役割意識

(47年度)

項目	性別		計
	男	女	
回答者数	290人	480人	770人
歴史研究史跡保存	45	35	80
芸能文化の伝承	17	20	37
生活文化の伝承	91	143	234
ふるさとづくり	34	67	101
自然保護	64	77	137
部落行事の運営	49	23	72
遊び場整備	41	76	117
昆虫飼育、園芸	34	93	127
雑巾づくり	1	79	80

4. 文化伝承活動の展開と問題

1) 伝統文化荒廃の原因

伝統文化の荒廃をめぐって、老人グループ、若妻グループ、青年グループなどの諸会合から、次のような問題点が浮び上った。

(i) 近代化、機械化のすすむ中で、伝統的な文化の価値観が喪失している。

(ii) 計画性、合理性が重視され、精神生活(心)がなおざりにされている。

(iii) 経済優先で、唯物的評価に偏重している。

(iv) よい郷土、よい集落をつくろうとする連帯意識が低く、また、伝承文化を守ろうとする意識も極めて低い。

(v) 古いことなどもち出しても、若い者は聞く耳もたないといった雰囲気の中で、高令者は伝承することに自信をなくしている。しかし、消え去ることには強い淋しさを感じ、何とかしたいと思っているが、具体的に

どう伝えるかということになると、半ばあきらめてしまう傾向にある。

(vi) 若者は、伝承に関することは高令者に任せておけばよいと割り切っているものが多い。

2) 活動の展開

以上にみたような問題状況から、普及活動としてとりこむ課題項目を、次のように設定した。

(i) 郷土文化の収集…郷土文化の再発見と愛郷心の醸成

(ii) 紙芝居による郷土文化の伝承と再現…家族や地域社会でのコミュニティづくり

(iii) 郷土文化の公開と伝達…高令者の生きがいづくりと技術の伝承

(iv) 趣味の交換…余暇活動の開発

(v) 奉仕活動の実践…社会人としての自覚の高揚

これら5つの課題項目について、それぞれ進めた具体的活動は、まず、(i)では、部落集会などを通して、郷土の生いたち、伝承文化の発掘、遺跡の確認をする他、町史の編纂と連携活動を行なった。次に(ii)については、土にまつわる先祖の歴史を、世代ごとのグループで紙芝居化したり、生活行事・行事食の収集と伝承(親世代と孫世代の交流会、あるいは伝承玩具、遊具の収集と再現(展示会、つくり方教室)や、伝承芸能の交流大会を開くなど、伝承文化の収集、再現、交流を世代間、地区間にわたる集会、展示会を通じて進め、コミュニティ意識の醸成をはかった。

(iii)では、作品展示会、伝承講習会を通じて民具、民芸技術の展示、行事食の伝達などを進め、高令者に自信をいだけせるとともに、技法の伝承をねらった。さらに(iv)で高令者を中心に盆栽、花づくりなどの趣味活動を、品評会の開催によって活発化し、この余暇活動を活かして、老人ホームの慰問など、(v)のねらいに沿って、奉仕のよろこびの中から社会人としての自覚をもつようにはかった。

3) 活動上の問題点と解決への取組み

普及活動を進める上で、とくに大きな障害となったのは、高令者が自分の考えを述べてくれないことであった。その理由としては、(i)諸会合に参加する機会が少なく、表現力に乏しい、(ii)笑われたくない、発言すると仕事を分担させられる、(iii)急激な社会変化の中で自信をなくしている…などが考えられる。

そこで、この障害をのり越えて、高令者の能力の再開発を進めるために、その手段・方法を整理して活動の場に移した。それを列記すると、次のとおりである。

(i) 援助活動の対象を、技能別にグループ化した会合の開催をはかる(紙芝居グループ、生活行事研究グル

ープなど)。

(ii) 小集団単位に趣味の交換会を開いたり、調査結果についての話し合いの場をもった。

(iii) 世代間の連帯活動の高揚をねらいとした集会の開催(各種のレクリエーション大会、伝承芸能の交流会、高令者と孫の会など)。

(iv) 高令者の自信回復の場の工夫(作品展示会、体験発表会)。

(v) 高令者の中から推進役を各集落から1名ずつ選び、仲間の声を活動に反映させた。

(vi) 高令者の活動を推進する組織体制をつくる段階で、メンバーを各種各層(普及員のOB、若妻会の代表、老人福祉相談員など)から選び、協力体制の充実をはかった。

こうした未開拓課題であった高令者活動への働きかけを通して、今後とくに重要と考えられる普及上の課題として、第1に、高令者に対しては、何かを教えるということよりも、高令者の長所をみつけ、その能力を助長することによって自信をいだかせ、その自信を裏付けとして公開の場へ積極的に参加するような方向への指導を、いかに進めるかである。

第2に、理論にだけたよるのではなく、高令者の動向、反応がまん強く見極めた上で、あくまでも具体的な事例を通して理解を得るための手だてが、必要なことである。

5. 活動の集約と今後の展開方向

家族、地域の中での役割を積極的に開発することを通じて、高令者が生きがいのある生活を送れることを課題として進めてきた普及活動の結果を集約すると、これまでとかく家にこもりがちだった高令者の、仲間づくり(紙芝居グループ、芸能グループ、盆栽・花づくりグループ、民話グループ)が達成されたこと、そうした高令者活動の機能をもった地区公民館の設置をみたことをまずあげることができる。しかもこれらの活動が、従来のとしよりだけのものから、高令者と子世代、高令者と孫世代など年代間相互の縦の交流が進んだことによって、子世代、孫世代の間に、自分達の郷土を見直す動きが活発化している点が注目される。

孫世代は郷土文化を再認識し、中山町はすばらしいという郷土に誇りと愛郷心もちはじめ、子世代は、所得追求の暮しに対する疑問の中から、伝統的な技能の習得を目指して、高令者から積極的に教わる機会をつくるようになってきている。今までふり向いてくれなかった生活文化を、積極的に継承するグループ(行事食グループ)の誕生などが、その端的な表われである。

高令者を中心とするこうした新しい動きに対応して、町の振興計画が高令者も含めた住民参加の下に進められ、農道の整備や圃場整備などの実施段階では、もっとも困難な権利調整の問題解決に、高令者が進んで裏方的役割りを果たすなど、新しい村づくりの波が次第に高まっている。町当局も、農家高令者生活開発事業を新設し、高令者代表20名に推進員を委嘱して事業の推進をはかっている。

以上の活動経過をふまえて、最後にこれからの普及活動への方向づけとして、次の諸点を掲げておきたい。

1) 子世代への老後生活設計誘導

あなたの老後生活のプランは、という質問に対して、無回答64%、有回答36%(趣味、慰楽のある生活11%、のんびり家族と仲良くくらしたい10%、子供の荷物になりたくない7%、子供の世話になる3%、その他5%)と、少数ではあるがプランをもっている人の具現化、さらに無回答者への啓発活動の推進。

2) 家族関係の近代化と役割構造の明確化

ただ単に家族関係を民主化、平等化するだけでなく、家族員としての責任と義務をもてるような役割をはっきりさせてゆく。

3) 地域コミュニティの再開発

文化伝承活動をきっかけとして、コミュニティづくりを進めてきたが、高令者、子世代、孫世代間の協力体制を強め、集落ぐるみでの望ましい地域社会づくりの推進。

4) 都市近郊農村としての心の安らぎの場としての位置づけ。

忙がしく働いている人々に対し、人間性回復の場として騒音、公害のない山あり、川あり、伝統文化豊かな住みよい生活環境づくりへの取り組み。